

舢倉島でとれたクビワコウモリ

前 田 喜四雄 奈良教育大学理科教育
原 田 正 史 大阪市立大学医学部実験動物研究室
竹 田 伸 一 石川県自然保護課 (石川県野鳥園)
野 崎 英 吉 石川県白山自然保護センター

THE FIRST RECORD OF EPTESICUS JAPONENSIS IN ISHIKAWA PREFECTURE.

Kishio MAEDA *Laboratory of Science education, Nara University of Education.*
Masashi HARADA *Laboratory of Experimental Animals, Osaka City University Medical School.*
Shin-ichi TAKEDA *Division of Nature Conservation, Ishikawa Prefecture.*
Eikichi NOZAKI *Hakusan Nature Conservation Center, Ishikawa Prefecture.*

石川県からは、これまでにキクガシラコウモリ科2種とヒナコウモリ科10種の合計12種が知られている(山本 1990)。今回新たに13種目のコウモリとなるクビワコウモリ (*Eptesicus japonensis*) (ヒナコウモリ科) 1個体が本県から見つかったので報告する。

このコウモリは、1988年10月15日に能登半島沖50キロにある舢倉島(輪島市)で、筆者の一人竹田により、鳥類標識調査のカスミ網で捕獲された。捕獲場所は島のほぼ中央の疎らなクロマツ林で、日中(午後)に捕獲された。この個体は捕獲時には余り元気がなかったものの、生きていた。

性別は雄で、翼を構成する骨の化骨や歯の摩滅状態から幼獣(生後3カ月未満)と推定された。外部計測値と頭骨の各部に関する計測値は表1のとおりである。

クビワコウモリは日本固有種で、しかも分布は本州中央部に限られている。従来 of 明確な捕獲記録地は、長野県北安曇郡白馬村、安曇村、大町市常盤、埼玉県秩父郡大滝村と富士山(前田 1984, Yoshiyuki 1989, 前田・山本 1992)があるに過ぎない。従って、今回の舢倉島からの本種の記録は今までの分布からかなりかけはなれていることが指摘できる。

本種の昼間の隠れ家(住み家)は、夏の繁殖コロニーが木造家屋に作られている1例が知られている(前田・山本 前出)だけである。しかし、本種と同属で北海道に生息するキタクビワコウモリ (*Eptesicus nilsoni parvus*) が樹洞を隠れ家としている(前田他 1992)こと、およびクビワコウモリの従来の捕獲場所が、大木のある林という環境から推察して、本種は多くの場合樹洞を昼間の隠れ家としていると思われる。舢倉島には、クロマツの疎林はあるものの樹洞のあるような大木はなく、舢倉島に本種が生息していることは考えられない。また、竹田は1982年以来、10月前後に何回か渡島鳥類調査を実施しているが、コウモリをみたことはない。また、これまでの動物調査でも確かな記録はなく(大串・徳本 1986)、今回の捕獲は舢倉島でのコウモリ類の初記録でもある。

唯一の昼間の隠れ家が知られている安曇村では、5月下旬から本種の妊娠雌が集まり始め、6月中、下旬に出産を行い、9月上旬までには親子共々どこかへ移動し、全くその姿を見せなくなる(前田・山本 前出)。今回の舢倉島での捕獲個体は雄の幼獣ということ、およびその時期を考えあわせると、安曇村のような繁殖地からどこかへの移動の途中で舢倉島を通過していた個体と思われる。

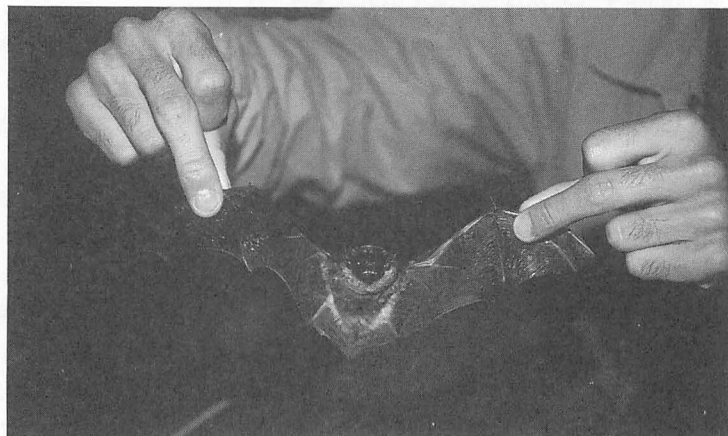
日本海に浮かぶ舢倉島は、春と秋に日本列島とアジア大陸の間を渡る鳥類の中継地として有名で、これまでに迷鳥も含めると284種が記録されている(日本野鳥の会石川県支部 1979, 1981)。この島で繁

表1. 石川県舩倉島で捕獲されたクビワコウモリの計測値 (mm)

外部形質		頭骨形質	
前腕長	40.0	頭骨全長	15.2
後足長 (爪なし)	15.0	頭骨基底全長	15.2
後足長 (爪あり)	16.0	上顎歯列長 (切歯-臼歯)	6.25
下腿長	16.0	上顎歯列長 (犬歯-臼歯)	5.6
頭胴長	54.0	吻幅	5.25
尾長	36.0	臼歯間幅	6.65
耳長	11.5	乳様突起間幅	8.85
		脳函幅	7.9
		脳函高	6.8
		下顎全長	11.2
		下顎歯列長 (切歯-臼歯)	6.3
		下顎歯列長 (犬歯-臼歯)	5.65

測定方法は前田(1983)に従った。なお、外部計測値はやや乾燥した状態のものである。

殖する鳥類は僅か6種に過ぎないが、渡りの最盛期には1日で80種の鳥類が記録されることもあり、鳥類にとっては渡りの途中の休憩、中継地として重要な島である。今回捕獲されたクビワコウモリは迷鳥のように単なる偶然にこの島へ迷い込んだか、あるいは渡りをする鳥類と同様にクビワコウモリの渡りをしていたうちの1頭である可能性もある。クビワコウモリが日本列島と朝鮮半島、アジア大陸の間で渡りをしているかどうかは、本種が日本固有種であるか否かという点で興味深く、今後の調査が待たれるところである。



文 献

- 前田喜四雄(1983) 日本産翼手類目(コウモリ類)の分類検索表. 哺乳類科学, 16:11-20.
 前田喜四雄(1984) 日本産翼手類の採集記録(1). 哺乳類科学, 49:55-78.
 前田喜四雄・川道美枝子・瀬川也寸子(1992) 斜里町における樹洞性コウモリ調査(2) 知床博物館研究報告(13) (印刷中)
 前田喜四雄・山本輝正(1992) 第4節 コウモリ. 安曇村村史, 安曇村 (印刷中)

日本野鳥の会石川県支部(1979) 舩倉島の鳥 pp.97

日本野鳥の会石川県支部(1981) 続・舩倉島の鳥 pp.26

大串竜一・徳本 洋(1986) 第II節 陸上動物, 2 舩倉島の陸上動物 舩倉島・七つ島の自然. 石川県. 55-56.

山本輝正(1990) 石川県のコウモリ, 石川の生物, 石川の生物編集委員会編集, 石川県高等学校教育研究会生物部会発行.
pp304. : 137-142.

Yoshiyuki, M. (1989) A systematic study of the Japanese Chiroptera. Nat. Aci. Mus., Tokyo, pp242.